

地域体験活動①

平和祈念館と大凧会館訪問

～平和を学び、伝統を学ぶ～

2025年9月7日(日)

滋賀県
子ども県議会
事務局発行 / No.3



地域体験活動では、子どもたちが県庁を飛び出し、地域に根付いた施設や団体を訪問し、直接お話を伺うことで、滋賀県の魅力や課題について学びます。今年は4か所の協力をいただき、子ども議員たちは各地で貴重な体験をさせていただきました。1回目の地域体験活動では、東近江市にある平和祈念館と大凧会館を訪れました。

吉田さんが語ってくださった“あの日”的こと

子どもたちは東近江市で戦争を経験された吉田 武司さん（1941年生まれ）から、当時のお話を直接伺いました。実際に戦争を体験した方からお話を聞く機会は年々少なくなっており、とても貴重な学びの時間となりました。

吉田さんは、1945年7月24日、国民学校1年生のときに八日市飛行場を狙った空襲に遭われました。4年生のお兄さんは帰らぬ人となりました。吉田さん自身も歩けないほどの重傷で、顔はすすぐ真っ黒になり、水も飲めず、濡れたタオルで唇を湿らせながら救護を受けたといいます。お話の中には、夜は灯りが漏れると空襲の標的になるため、ほんの小さな灯りだけで食事をしていたことなど、常に恐怖と隣り合わせであったことが語られました。

吉田さんは、当時の状況を語りながら、今も残る傷跡を子どもたちに見せ、「戦争は絶対にしてはいけない」と伝えてくださいました。その言葉には、実際に戦争を生き抜いた人にしか語れない重さがあり、子どもたちは真剣に耳を傾けていました。



子どもたちが感じた、平和の尊さ

また、展示を見たり、平和祈念館の川副さんのお話を聞いたりする中で原爆の試験として“パンプキン爆弾”が落とされたこと、戦争によって多くの命や日常が奪われたことなどを学びました。展示資料や写真を見ながら、子どもたちは「戦争は遠い場所の出来事ではなく、この滋賀でも起きていたことなんだ」と実感している様子でした。

見学後の子どもたちは、「戦争の怖さを忘れてはいけないと思った」「話し合いで解決できる社会をつくりたい」「戦争が始またら止められないから、始めないことが大切」などの声があがりました。また、戦争の記憶を語り継ぐ人が少なくなる今、自分たちがしっかり学び、次の世代につないでいくことの大切さも感じていました。

目の前に広がる“100畳の迫力”に圧倒されました



大凧会館では、畳100畳分、約11.8m×11.1mの大凧を実際に目にし、子どもたちはその圧倒的なスケールに驚いていました。本体だけで約200kg、ロープなどを含めると700kg近くになる重さに、「こんな大きなものが本当に空に上がるの?」という疑問とともに、飛ばす人たちが命がけで凧を揚げてきたという話に大きな衝撃を受けたようです。大凧は単なる遊びではなく、地域の誇りと覚悟が詰まった文化であることを、子どもたちは強く感じていました。

技術と工夫がつまつた“伝統のものづくり”に感動しました

大凧会館の鳥居さんより説明を受ける中で、大凧づくりには約1ヶ月という短期間で600人もの人が関わること、和紙を切り抜いて模様をつくる「切り抜き工法」や、巻いて運べる独自の構造など、驚くほどの工夫が詰まっていることを学びました。動物の絵と漢字を組み合わせて意味を表現する「はんじもん」、裏に貼られる願い札など、大凧には一つひとつに物語や願いが込められています。子どもたちは“デザインにちゃんと意味があること”、“かわいいキャラ凧も実は深い意図があること”に気づき、ただ眺めるだけではわからない伝統技術の魅力を肌で感じていました。



伝統をつなぐことへの思いと、地域への関心が深まりました

東近江の大凧が江戸時代から続く長い歴史を持つこと、近江の人々が競い合うように大凧を大きくしてきた背景などを知り、子どもたちは「伝統を守り続けることの大変さ」と「それでも続けてきた地域の力」を感じ取っていました。「新しいことを取り入れることも大事だけれど、伝統を受け継ぐことの方がもっと大切だと思った」「たくさん的人が関わっていることに驚いた」といった声も多く、地域文化への理解と、自分たちがその一部であるという実感が深まったようです。今回の見学は、地域に息づく文化を次の世代へどうつないでいくかを考える、貴重な体験となりました。



地域体験活動にご協力いただきました皆さまへ

今回の平和学習は、戦争の事実を知るだけでなく、自分の言葉で平和を考える大切な時間となりました。また、大凧会館では地域の伝統や人々の思いに触れ、多くの学びを得ました。ご協力いただいた吉田さん、平和祈念館の皆さま、大凧会館の皆さまに心より感謝申し上げます。